

校長室だより		令和6年6月12日発行
共学共高	第	
	70	発行責任者
	号	白梅学園高等学校長 武内 彰

総合的な探究の時間～2年生

6月12日（水）、2年生の総合的な探究の時間にお邪魔した。

それぞれの生徒が自らのテーマを設定し、そのテーマを設定した理由、これまでわかったこと、新たに生じた問いなどについて、プレゼンテーションをする、いわば中間報告である。

見ていて感じるのは、生徒によって興味・関心や着目点が異なり、テーマ設定が個性的だということ、それに個々の生徒がよく考えていて、自分の言葉でしっかりと表現していることだ。その姿はとても頼もしい限りである。かつて、総合的な学習の時間が学習指導要領で導入されたときには、懐疑的な意見もあったように記憶している。しかし、こうした生徒の様子をみていると、現代を生きる生徒たちの学びは単に受け身的なものではなく、学問探究や社会的課題の解決に向けて、学んだことを総動員していく能動的な学びとなっている。そして、それはこれからますます大切なものになっていくと、感じさせられる。何人かの生徒の発表を紹介したい。

まずは、Aさんのテーマは、「発達障害・グレーゾーンの子どもたちへの声掛け・接し方」である。Aさんは、保育士志望である。ゆえに、こうした課題を抱えた子どもたちにどのように接していけばよいのかを探究している。調べていくと、感覚過敏の実態があるようだ。例えば、音が聞こえすぎる、脳を疲弊させる視覚過敏、触覚・味覚過敏など、子どもたちによって異なるので、それを理解してあげることが大切だ。また、ワーキングメモリ（作業記憶）が弱い場合、大切なことを強調しながらゆっくり伝えることも必要だ。さらに、集団の中では見通しがついた予定を示してあげることによって問題行動につながらなくなることもある。失敗経験が積み重なるとトラウマとなるので、それを避けるようにする。「CCQ」といって、「穏やかに、近づいて、静かに」接することが肝心らしい。さらには、子どもをほめるときには、はっきりと聴こえる声で身振り・手ぶりも加えてあげると、行動の強化につながるという。新たな問いとしては、「この10年間で、発達障害が増加している原因を知りたい」という。発表が終わると周囲から拍手が起きる。担当のT先生からは、「世界の中にはトレーニング方法などが確立しているところがあるかも知れませんが、それを探してみるのもいいかもしれないですね。」とのコメントが伝えられた。



次に、Kさんの発表は、「なぜ日本人は、うつ病の発症率が外国人よりも高いのか」である。世界の中では日本人は2番目に発症率が高いという。日米を比較すると、発症の理由として日本人では83%が「仕事上のストレス」、アメリカ人では67%が「自分の将来に対する不安」となっている。また、「職場での人間関係」が原因となる割合は、日本人では44%、アメリカ人では18%だという。日本人は、真面目で責任感が強い、ことが一因ではないかとのことだ。T先生からは、「インターネットから収集したデータの根拠を示すこと、また、これからどのように深めていくのか考えていきましょう、日米の人間関係の相違について抑えるといいかも知れませんね。」との助言があった。

続いて、Mさんは「自殺に至ってしまう心理」、Aさんは「非行少年を生み出す子育て」、Eさんは「ギャンブルはなぜ辞められないのか」について中間報告を行った。まだまだ、途中経過ではあるが、どれも興味深く、発表を聞いていて、質問をしたり、この生徒と対話をしたりしてみたいなという思いがこみ上げてくる。

彼女たちがこれからどのように学びを深めていくのか楽しみである。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)